

《海外展望》

## 変わりつつある北朝鮮は 「強盛大国」への道を突き進む

(2012年8月3日)

昨年末に金正日総書記が亡くなり、後を継いだ金正恩第一書記が進める改革の方向がおぼろげに見え始めてきた。これまで分厚い秘密のカーテンで閉ざされてきた国が、わずかだがその姿を明らかに

し始めている。しかしそれは東アジアに巨大な衝撃をもたらす可能性もある。

北朝鮮はどう変わり、何を目指しているのか。北朝鮮の最新情勢を眺めてみよう。

### 突如解任された「軍のトップ」李英鎬

さる7月15日、北朝鮮を注視していた外交専門家、情報通、マスコミの間に緊張が走った。朝鮮人民軍の頂点に立ち、金正恩第一書記の後ろ盾とも見なされていた李英鎬（リヨンホ）総参謀長が突如として「すべての役職を解任」されたからだ。解任理由は「健康上の理由」と説明されているが、それを信じる者はほとんどいない。

この奇妙な人事を読み解くには、李英鎬がどんな人物なのかを見る必要がある。

李英鎬（李英浩とも表記）は1942年生まれの満70歳とされる。生年月日について1940年生まれ等異説はあるが大差はない。1950年代の半ば以降に朝鮮人民軍に入隊したとされる。15歳で入隊したとすれば朝鮮戦争から数年後の1955～1957年頃ということになる。入隊後、学力を認められて金日成軍事総合大学に送られ、

優秀な成績で卒業している。若い頃から期待されていた軍人だったと想像できる。金日成時代に護衛部隊に在籍していたとか、首都である平壤市の防衛司令官に就いていたとの情報もある。

李英鎬の名が表に出るようになったのは2008年秋以降のことだった。

2008年秋、金正日総書記が体調を崩した。

この時期に金正日総書記は自分に残された時間が短いことを理解したらしい。金正恩が後継者と内定したのはこの2008年秋のことだったと推定されている。このときに、それまで名前など見かけたこともない李英鎬が参謀長に就任。さらにその4カ月後の2009年2月には3ツ星(3ツ星＝世界的には中將。北朝鮮の階級では大將)に昇格し、軍のトップとも言える総参謀長に昇格している。

金正日総書記の体調が不安なものとなり、後継者体制確立が急務という状況下、李英鎬が突如として軍のトップに抜擢されたわけだ。金正日総書記が李英鎬を高く評価していたことが理解できる。李英鎬が総参謀長に就任した3カ月後の2009年5月、北朝鮮は在外公館に対し「金正恩が後継者に選ばれた」ことを通知したと報じられている（韓国『東亜日報』）。

そして2010年秋には労働党代表者会議を行って新体制を内外に明らかにし、憲法改正を行っている。

2010年9月に李英鎬は次帥に昇格。党政治局常務委員に大抜擢されたが、何より目を見張らせたのは、金正恩と並んで李英鎬が党副委員長となったことだ。党副委員長というポストは、このとき新設されたものだが、後継者・金正恩と並んで李英鎬が党副委員長になったという事実は、軍のトップが金正恩体制をバックアップしていると内外に明らかにすることにあつた。

金正恩を後継者とする体制がどうやら整ったと思われた2011年12月17日に、金正日総書記が死亡した。

金正日総書記は恐らく自分の死の刻を察知していたのだろう。北朝鮮が強盛大

国として羽ばたく日を夢想し、その実現を息子である金正恩に託していたと考えられる。金正恩をバックアップする軍の実力者として、金正日は李英鎬にすべてを託したのだ。

金正日総書記の葬儀のとき、棺が載せられたリンカーン・コンチネンタルの右側には金正恩を先頭に張成沢など党を代表する4名が並び、左側には李英鎬を先頭に金永春など軍を代表する4名が並んだ。葬儀での並び方を見ても、李英鎬がいかに重要な人物であるかが理解できる。

金正恩体制で最重要人物の一人と見られていた李英鎬が、今年7月15日に突如としてすべての職務を解任させられたというのだから、これは大事件である。しかも韓国の『朝鮮日報』によると、李英鎬が解任される過程で銃撃戦が発生したというのだ。『朝鮮日報』が韓国政府筋から入手したとされる情報によると、交戦中に死亡した軍人は約20人に達するという。政府筋は一応この情報を否定しているが、虚偽情報だとしているのではなく不明としているだけだ。もし銃撃戦が事実なら、北朝鮮の金正恩体制と軍が対立している可能性が考えられる。はたして、そんなことがあるのだろうか。

## 李英鎬失脚への道筋

マスコミ情報を見ていると李英鎬の解任劇は突然のように感じられる。だがじつは今年の春以降にはその兆候は表れていた。それは金正恩体制が金正日体制と決別しようとする動きの中に読み取ることができる。

その最初の動きは4月13日に表出した。

この日開催された北朝鮮最高人民會議に、7人の国防委員メンバーのうちの1人が姿を現さなかったのだ。消えたのは禹東則（ウドンチュク）国防委員。禹東則は中央軍事委員会委員で、金正恩体制

を支える軍人の一人と目されており、金正恩に反旗を翻す軍関係者に対し大規模な粛清を行い続ける執行人との評判があった人物である。死刑執行人のように恐れられていた本人が粛清された可能性すら考えられる。

さらに4月には人民武力部長（国防大臣に相当）だった金永春（キムヨンチュン）が解任され、代わって金正覚（キムジョンガク）前総政治局第一副局長が昇格している。金正日総書記が息子のために作り上げた人事配置が、4月になって、どんどん変更されたのだ。

そうしたなか、最大の出来事は4月に人民軍総政治局長に就いた崔竜海（チェリョンヘ）だ。

崔竜海は金正日総書記が死亡した昨年末の時点では、序列第21位とされていたが、4月の人民軍総政治局長就任と同時に、金永南（キムヨンナム＝最高人民会議常任委員長＝国家元首相当）、崔永林（チェヨンリム＝内閣総理＝首相相当）に次いで序列第3位に昇格している。18人をごぼう抜きにした大抜擢である。

崔竜海の父は崔賢（チェヒョン）と言い、朝鮮人民軍大将だった軍人。金日成首領直系の親衛隊長である。金日成の脇に立ち、誰かが反対意見を述べると「貴様は首領に逆らうのか！」と一喝するや腰から銃を抜き、その場で射殺してしまうという乱暴な軍人で、「獰猛な毒蛇」と渾名された男だった。息子の崔竜海は父親の血を受け継いでいるとの評判だそう。

そんな崔竜海が人民軍総政治局長に就任し、84歳の金永南、83歳の崔永林に次

ぐ序列第3位になった。これはいったい何を意味するのか。

「人民軍総政治局長」とは、党や軍など政権に在籍する実力者たちの「忠誠度をチェックする機関」である。情報保全や憲兵を越える存在で、ここに睨まれたら一巻の終わりといった部署だ。「獰猛な毒蛇」にぴったりの地位と言えらるだろう。

では、65歳になった崔竜海は、序列3位の地位を利用し、金正恩体制の内側から何かを仕掛けようとしているのだろうか。——それは考えられない。人民軍総政治局長とはアラ探しが役割であって、創造力が要求される地位ではない。崔竜海自身も、新たな国家戦略を生み出すような人材ではない。

崔竜海とはじつは張成沢の側近中の側近、張成沢の影のような存在なのである。

金正日が心から愛し可愛がった妹、金敬姫。その金敬姫の亭主が張成沢である。

金敬姫が金日成総合大学在学中に見染めた男が張成沢だった。ところが金日成はこれを認めず、金敬姫が自殺未遂を起こしたとの噂話もある。金日成を納得させ、二人を結ばせたのは金正日だった。その後、張成沢は理由は不明だが何度か失脚状況に追いやられ、思想改造という苦しい立場に置かれたようだが、その度に復権して、2010年には金正日に次ぐ地位を確立させたと思われている。

崔竜海とは、この張成沢の傀儡と見なしてよい存在なのだ。

今年（2012年）5月9日に李英鎬が高位軍事代表団を率いてラオスを公式訪問している。このとき李英鎬はラオス首相など高官と会談を行っているが、崔竜海

が人民軍総政治局長に就任して1カ月足らずの時期に李英鎬がラオスに行ったこと自体に「罨」が仕掛けられていたと思われる。留守中に自宅や勤務先などが徹底調査され、弁明ができない本人不在中に思わぬ証拠物件が出てくることは、旧ソ連や旧中国などではよくある話だった。推測話ばかりで申し訳ないが、恐らく李英鎬ラオス訪問中に、崔竜海は李英鎬の「悪行の証拠」を掴んだ——いや、捏造したのだろう。

7月8日に金正恩と李英鎬は揃って錦繡山（クムスサン）太陽宮殿を訪問している。太陽宮殿とは金日成、金正日の遺体を保存する施設だ。崔竜海人民軍総政

### 軍経済をコントロールするために

北朝鮮情報通とされる多くの識者、評論家たちは今回の事件を「金正恩 V.S 李英鎬」あるいは「金正恩体制（張成沢を含む金王家） V.S. 李英鎬に代表される軍部」の内部抗争と分析している。しかしそれは北朝鮮事情を正確に理解していない証でもある。

小さな国内で権力闘争を繰り返すことなど大馬鹿のやる所業だ。金正恩はそれをよく理解している。李英鎬追放が単なる権力闘争ではないと断定できる動きの一つは6月28日に金正恩が発表した「新経済政策」にある。

今年是世界中で異常気象が起き、早魃と洪水、高温と低温が甚大な被害をもたらしている。北米や中国の早魃、洪水の情報はよく耳にするが、北朝鮮も例外ではなく、4月以降6月下旬に至るまで雨

政治局長により「忠誠心」に違反していると断じられたであろう李英鎬が、金正恩と共に太陽宮殿を訪れているところに、両者の心に去来した感動を推測したくなる。ちなみにこの太陽宮殿参拝時に、金正恩は李雪主（リソルジュ）夫人を同伴している。このときのニュース映像では李雪主ばかりに視線が集まっているが、李英鎬が同席していたことは忘れないでほしい。

太陽宮殿参拝からちょうど一週間後の7月15日、日曜日にも関わらず異例の党代表者会議が招集され、李英鎬の全職務解任が決定された。

がまったく降らなかった。結果、北朝鮮の穀倉地帯は大早魃となり、食糧危機が懸念される状況にある。昨年までの北朝鮮だったら早魃は公表されず、飢饉は口伝で密かに伝えられるものだった。ところが金正恩は6月28日にこの大早魃の実態を公表し、食糧危機に真正面から取り組もうとする姿勢を見せている。明らかに金正日時代とは異なった姿勢である。以前だったら、そんな発表を軍が容認することはなかった。

7月末には大規模な洪水が発生したが、朝鮮中央通信（KCNA）は洪水発生翌日（7月31日）にはその被害状況を報道。国連が調査団を派遣し、北朝鮮当局がこれを受け入れている。

6月28日の新たな経済政策について、中国や韓国では「北朝鮮内部消息筋の話」

として「協同農場と国営工場に対し、市場価格が反映された生産費用を先払いするとの内容を骨子とする、新たな経済管理政策を準備している」と報道している。

北朝鮮の経済事情は正確には把握できていない。

しかし北朝鮮経済が三層構造を持っていることはよく知られている。

第一に王室（金一族）経済、そして第二に軍経済、最後が庶民大衆の経済である。

北朝鮮は極度の貧困国家だと思われているが、それはかなりの部分で真実である。庶民大衆の年収は10万円を下回る程度だ。とは言っても共産主義国家だから、住居、光熱費、食糧に関しては最低限保証されている。食・住が支給されたうえで、年収10万円ということだ。

それに反して支配者である金一族の経済は驚くほど潤沢である。金一族とはおよそ100ファミリーから成り立っているとされるが、その頂点はもちろん金正恩だ。つい先ごろ、金正恩が身につけている腕時計が話題になった。スイスの最高級、いや世界一の腕時計といわれるパテック・フィリップのカラトラバ・フラットベゼルというモデルで、価格は780万円だという。一般家庭の年収の数十倍もする腕時計をしているのだから、どれほどリッチなのかは想像できるだろう。

庶民経済と王室経済との間に軍経済がある。

朝鮮人民軍の経済を動かしているのは第二経済委員会という組織だ。第二経済委員会は海外貿易を初めとする独立した組織体として機能している。例えばイラ

ンにミサイル部品を輸出する場合には、第二経済委員会が日本の部品メーカーに依頼し、日本のメーカーから直接イランに送られる仕組みだ。

いちばん多い例として、名古屋一帯に存在する三菱重工、三菱電機等の下請け孫請け弱小末端企業が使われる。ミサイル部品とは思えない極小の単位にまで分解された部品を第二経済委員会が発注するわけだ。孫請け末端企業は、薄々は理解していると思われるのだが、このような形で北朝鮮のイラン輸出に参画している。

イランへのミサイルの話題を取り上げたが、第二経済委員会が扱うものは武器兵器に限ったものではない。野菜、魚介類から日用雑貨に至るすべてを扱う商社といった雰囲気すらあるのだ。その結果、軍経済はある程度潤沢になっている。

軍と経済体制が合体することは、常識的に考えて危険である。カネを手にした軍が暴走を始めたとき、それを制御できなくなるからだ。金正恩あるいは張成沢が第二経済委員会——軍経済と対立し、これをコントロールしようと動くのは当然のこととも思える。米国、韓国の情報担当者たちは、金正恩が第二経済委員会を掌握したと見ているようで、それなりの情報を入手しているのかもしれない。

穿った見方もある。

北朝鮮の軍経済を握っている第二経済委員会のトップは国防委員の白世鳳（ペクセボン）である。ところがこの白世鳳の正体は、金正恩の実の兄である金正哲ではないかと噂されている。正哲・正恩の兄弟喧嘩が根底にあるという見方だ。

全体の流れから見て、それはないと考えていいだろうが、そうした見方があるこ

とはお伝えしておこう。

### 「先軍政治」からの脱却

李英鎬の更迭劇は、単に李英鎬だけの問題ではない。人民武力部長が金永春から金正覚に交代したことや、張成沢の側近である崔竜海が人民軍総政治局長に就任したこと、また金正恩第一書記が活発に国内視察——それも生産現場や農場を訪れていることから、北朝鮮がこれまでとは違った方向に動き始めていることが見えてくる。

では北朝鮮はどの方向に舵を切っているのか。

初代・金日成首領が目指した国家経営である。

金日成は労働党が一元管理する国家にしようとした。対立する政敵や派閥を排除し、粛清し、労働党を強固な一枚岩にまとめあげることに専念した。

二代目・金正日総書記は先軍政治を掲げ、軍中心の国家体制を築こうとした。

三代目・金正恩第一書記は軍の権利権益を剥奪し、党中心の政治体制を確固たるものにしようとしている。

金正恩は登場したそのときから金日成を目標にしていたと思われる。容貌も顔つきも、整形手術をしたのではないかと疑われるほど金日成に似ていた。身のこなし方、話し方もまた、金日成の真似をするかのように、よく似ている。

また北朝鮮は「先軍政治」からの脱却を目指していると思われる。

方向としては「改革開放経済」に向かっていると考えていいだろう。では、こうした北朝鮮の方向性を仕切っているのは、崔竜海の背後にいる張成沢なのだろうか。

実際に仕切っているように見えるのは労働党書記局だから、張成沢が動かしたと言ってもいいように思える。しかし現実には、張成沢を動かし書記局を動かしている影の存在が透けて見えてくる。張成沢の夫人、金敬姫だ。

2010年秋の党代表者会議で北朝鮮は憲法を改正している。改正した結果、北朝鮮の憲法の文章からマルクス・レーニン主義も共産主義も消えてしまい、北朝鮮を「金日成の国家」と言明している。北朝鮮は名実ともに「金王家の国」なのだ。比喩的な表現ではない。北朝鮮の憲法を読めば、正しく「王朝」であることが理解できる。「王朝」である以上、初代・金日成に近い人間ほど権力を掌握できることになる。

金正恩は金日成の直系の孫であり、全権力を掌握している。同時に金日成の子である金敬姫もまた権力を握る人物なのだ。

北朝鮮の実力者、金敬姫、張成沢は金正男とも親しく、ほぼ毎日のように携帯電話で連絡を取り合っている。三男・金正恩と長男・金正男の関係は非常に微妙で、金正恩がマカオに滞在していた金正

男に刺客を放ち、中国政府が金正男の護衛についたなどという物騒な情報が流れたこともあった。事の真偽は不明だが、二人の関係はそうした噂が罷り通る状況にあると考えられる。

金正日没後、金正男の口座に北朝鮮本国からの送金が途絶え、マカオのホテルを退出したとの情報も駆け巡った。その金正男は最近、金敬姫、張成沢から連絡を受け、ゴシップ情報流出がないよう本国に戻された模様だ。

軍関係者の実力者を追放し、忠誠心が疑われる人間を摘発できる体制を整え、兄弟たちの動きを制限することで、金敬姫、張成沢の二人は、金正恩が存分に動けるようにバックアップ体制を整えていると考えられる。盤石の体制の下、金正恩は新たな方向に舵を切り始めている。

今後の北朝鮮の政治、とくに外交姿勢は注視する必要があるが、わが国にとって直面する問題は北朝鮮が対日外交をどう捉えているかである。

李英鎬が全役職を下ろされた5日後の7月20日に、金正恩は東京の朝鮮総連支部大会に向けてメッセージを送っている。その中で金正恩は「朝鮮総連と在日同胞は、祖国の平和統一と強盛国家建設に貢献し、日本との友好親善を深めなければならない」と言っているが、ここに金正恩の本心がある。

これより1週間以上も前の7月12日に、日朝友好促進東京議員連絡会などの記念講演で金丸信吾（金丸信元副首相の息子）が「国交正常化こそが日朝間の問題を解決する一番の近道だ」と語り、これが『朝鮮新報』日本語版で大きく取り上げられ

ている。恐らくは金丸信吾が重要なのではない。日朝国交正常化が重要だとする発言が大きく取り上げられたところに、北朝鮮の意思が感じられる。

現在、北朝鮮に対する制裁措置の一環で、日朝交流はほとんど行われていない。しかし日朝間に交流、貿易があった時代に、日朝貿易のほぼ100%を仕切っていたのは、軍が管理する第二経済委員会だった。この組織は前述した通り、現在では軍ではなく金正恩が掌握することになっている。わが国の財界の本音もまた、日朝貿易を切望する状況にある。日朝国交回復を成立させるための環境は整いつつあると考えていいだろう。

7月21日に金正日の料理人と呼ばれる藤本健二がマグロを抱えて北京から平壤に飛び立った。その藤本は直前に拉致問題担当相で国家公安委員長でもある松原仁と秘密裏に会っていたと伝えられる。また北朝鮮の宋日昊（ソンイルホ＝朝日国交正常化交渉担当大使）が北京などで日本人と密会を重ねているとの情報も聞こえてくる。

民主党政権が水面下で北朝鮮と交渉を重ねていることは以前から知られていた。それは決して悪い事ではない。素晴らしい話だと言っていいだろう。しかし民主党の動きが、単に政権延命工作や人気取りで終わることは許されない。

あるいは民間レベルで、料理人の藤本健二や池口恵観などなどが動いているようだが、こちらも単に目先のカネや話題作りが目的であってはならない。

日朝国交正常化とは、東アジアに途轍もない激震を引き起こす重大事である。

日朝が国交を回復し正常な状態になれば、日本を取り囲む領土問題——北方領土も竹島も尖閣諸島問題も、吹っ飛んでしまおうし、米中対峙の緊張関係も、対立の図式が根底から変わってくる。

東アジアの未来、世界の未来のために、変貌を遂げつつある北朝鮮とどう向き合うべきか、日本の姿勢が問われている。

